

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4373000688		
法人名	社会福祉法人 栄和福祉会		
事業所名	グループホームたのうらそう		
所在地	熊本県葦北郡芦北町大字田浦町822-3 (電話)0966-67-3430		
自己評価作成日	平成21年12月15日	評価結果市町村受理日	平成22年2月23日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://search.kaigo-kouhyou-kumamoto.jp/kaigosip/infomationPublic.do?JCD=4373000688&SCD=3201
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人ワークショップ「いふ」		
所在地	熊本県熊本市水前寺6丁目41-5		
訪問調査日	平成22年1月22日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

利用者には、いつも明るい笑顔で楽しい声掛けとやさしい態度で介護にあたることを心掛けています。生活の中では食事が一番の楽しみなので季節や行事などにあった献立と心のこもった調理で、利用者楽しく感性あふれた食事内容としており、レクリエーション活動やリハビリは、「あそびReパーク」と連携し認知症の利用者にあつた遊びリハビリに取り組んでいる。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

平成22年4月の「たのうらそうII」の開業を目指し、ホーム運営全体の見直しが行なわれており、書類の簡素化、利用者毎のファイルの整備、申し送りや連絡事項の周知方法等、様々な改善が実施されている。法人全体で導入された「上申制度」の活用で、職員の意見や提案も出し易く、ホーム運営にも反映されるので、職員のモチベーションアップや職場活性化に繋がっている。今後、ボランティア受入れを増やしたり、芦北高校福祉科のレクリエーションの発表の場としてホームを提供するなど、地域交流、世代間交流も計画されており、地域密着型サービス事業として、地域への貢献が期待される。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き生きと働いている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	当事業所の理念で「自然と共生し笑顔が絶えない安らぎのある家をつくります。」とあります。地域スーパーへの買い物や季節行事でのドライブ見学で積極的に地域へ出かけている。	理念は、利用者が季節の移り変わりを感じながら、笑顔で暮らして欲しいという思いで作られている。ホーム周辺を散歩し、住み慣れた環境で自然を楽しみながら、地域の子供達と触れ合い、安らぎのある暮らしを支えるホームづくりを目指している。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	近隣の保育園児の散歩コースに当事業所を訪れていただいたり町社協主催の「たっしやか会」や「あそびReパーク」などに参加し交流を行っている。	老人会や地域のお年寄りが参加する「たっしやか会」や「あそびReパーク」に入所者も参加し、健康体操やゲームを楽しみがらリハビリを行なっている。先生をしていた入所者が参加者の教え子と再会することもあり、地域との交流を大切に支援している。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	「あそびReパーク」に参加をしているが利用者の昔の記憶から昔遊びを取り入れられたり利用者の若かりし頃の写真をプロジェクターで流し当時の思い出を語り合ったりしたりリハビリを行った。先駆け的に行っている為に今後地域に活用していくと話されていた。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	運営推進委員の方からは利用者にあった遊びを考えていただいたり小物作りを考えてこられたので実際に作り活用している。	地区会長、役場職員、民生委員、地域包括支援センター、利用者、家族代表等の参加で2ヶ月に1度開催されている。ホーム側からの事業報告が主に行われている。	地域との交流、ボランティアの受入れ、災害時の支援体制など、予めテーマを決めた話し合いを計画すると、より活発な意見も期待され、サービスの質の向上に活かされると思われる。
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	地域密着型施設として町の担当者には事業を行う上で疑問点などがあれば連絡をとり尋ねたり毎回の運営推進会議には、出来る限り参加をしてもらっている。	「たのうらそうII」の4月開業が予定されており、新設業務に関しての手続きも、町の担当者の支援を受けながらスムーズに行なわれている。法制度改正時にも速やかに情報を得ている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	屋間玄関の施錠は開放しており利用者が外に出ようとされるときは一緒に付き添い転倒防止に努めている。身体拘束の禁止事項については法人の指針をファイルし職員に周知している。	徘徊のある人は散歩に付き添い、帰宅願望がある人は、車で自宅近くまで出かけた後、その人の思いに沿った支援を実施し、拘束をしないケアの実践に努めている。居室で転倒の危険がある人は、起床センサーで感知し、見守りの強化をしている図っている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	運営推進委員の地域包括職員から話をしてもらい職員も研修会GH内での勉強会に参加し互いに虐待が行われないようまた、見過ごさないように注意している。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	地域の「認知症ケア部会」などの研修会に参加を行い成年後見人制度などを勉強している。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	以前は家族説明会を行い説明を行ったりしていたが現在は、一同に会する機会は設けていないのでポストやケアプランの送付時に意見があれば書いてもらうようにしている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	運営推進会議に家族代表を一名参加してもらい家族からの意見を述べていただいている。意見には答えて改善点があれば改善を行っている。	車椅子をリクライニングにして欲しい、食事にそうめんを出して欲しい、胃に負担が掛からないようなキザミ食にして欲しい等、個々人の要望は、その都度対応している。運営に関する利用者や家族の意見は少ないように伺えた。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	上申書を設けられ職員の提案や意見を出して改善する部分は改善を行っている。	昨年、法人全体で導入された上申制度の活用で、職員の意見が出し易くなり、ホーム職員も積極的に提案している。洗濯代削減の提案、農機具用倉庫の活用、事務室用エアコンの脱衣所への移設など、提案は検討され運営に反映している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	職務分担表で各職員の仕事の明確化を行い人事考課表を用いて職員の向上を行っている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	月に一度の法人全体での勉強会に参加、田の浦荘の職員である前に一人の人間としての常識を身に付けていくように指導されている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	水俣・芦北のGHブロック会に参加し同業者の交流の中から意見交換などを行い事例検討などを参考にしている。		
II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入所初期の場合は家族からの聞き取りでご本人の履歴を知るようにしており不安を取り除く上で昔話などを持ちて生活に慣れていただくようにしている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	面会時やケアプラン作成時に要望と意見を聞いて利用者の生活に取り入れたりしている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	医療面でのサービスが必要ならば訪問看護や主治医の往診をお願いしたりしている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	リハビリ体操やレクリエーション時に昔の歌や童謡など利用者から教えてもらうことも多々ある。回想法では干しから芋の作り方やニッケなども教えてもらった。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	ほぼ毎日面会に来られていた家族には利用者との触れ合う時間をゆっくり過ごしていただくようにしたり以前は野菜売りを企画して家族に買っていただいたりした。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	故郷訪問や住み慣れた場所にドライブに行き馴染みの方との出会いがあったりする。またGHは面会自由で昔なじみの面会者もいらっしやる。	ホーム入居にともない、空き家となっている自宅に戻り、家の中に風を通して、近所の人に挨拶をするなど、馴染みの関係を大切に支援している。これまで、月1回程度だった外出を来年度は月2回に増やし、馴染みの人や場所への訪問機会を増やすことを計画中。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	レクリエーション等の参加は全員に声掛けを行い参加してもらっているが体調が悪い方、「やりたくない」といわれれば尊重して無理に誘っていない。		
22		○関係を断ち切らない取り組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	退所になられた方は、法人の特養に移っておられる方が多いので関係性は続いている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	家族から昔の暮らしぶりなどを聞き話題の中に入れて昔の若かりし頃の写真を家族にお願いし借用行いそこから暮らし方などを探っていった。	家族の情報で生活歴を知り、若い頃の写真から現役時代の様子を伺い、話を聞きながら思いを探る取り組みに努めている。先生だった人、保健師だった人、大手企業に勤めていた人、それぞれの思いや暮らし方に添った支援に工夫している様子が伺えた。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	遊びりパークで回想法に取り組み昔の写真や遊びなどを用いて生活歴などを把握しGHでの生活に楽しみが出来るようにしている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	職員間での申し送りで夜間の様子と状態把握に努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	ケアプラン作成の前に家族と本人に要望を聞きその後、職員間の意見を聞きながら作成をしている。	アセスメント、居室での様子、夜間の状態等を参考に本人や家族と話し合い、ホーム長がケアプランを作成。今後は担当者が案を練り、ホーム長に相談して作成するように手順を変更し、担当者の意識や、責任感を高め、チームで作るプランへと改善中。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	日々の日誌記録、個別の支援経過記録を記載し担当者の気づきなどは申し送りファイルで回覧できるようにしている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	10月にはコスモス見学に行ったが、応援を本部の栄養士やデイサービス職員と一緒に同行してもらい利用者の満足感があつた。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	「あそびReパーク」に参加して認知症を持っている利用者にあたりハビリプログラムを実施してもらっている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	週に一回の主治医による往診と訪問介護も週に一回の訪問があつて利用者の体調面での相談に答えてもらっている。	協力医院からの往診や訪問看護があり、利用者と家族の安心に繋がっている。地域内の病院へは職員が付き添い、遠方への受診は、家族の同行を依頼している。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	訪問看護は月曜日に来られておりその都度薬や利用者の体調面を相談している。また、職場内の看護師にも薬の件などを相談している。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院された方については病院に問い合わせたりしているが「基本的に答えられないとの事で家族から聞いてください」と返事があるが、その時はご家族へ連絡行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	現在、等事業所での看取りを行わない方針なのでその旨の説明は入所に説明を行い重要事項説明に書名、押印をもらっている。	平成19年に、「入院・医療面に関する定義」としてホームでは看取りを行わない方針であることを家族に説明し、同意を得ている。その後の入所者には、入所時に説明し、同意を得ている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	11月に法人の本部の方で救急救命の講習会があったので新人職員等が参加している。		
		火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	防火訓練は直近で10月に行い通報訓練及び避難誘導訓練を行った。今年度は3回を予定しているので次回2月の予定である。地域への協力は運営推進委員で近隣の方には災害時の協力を呼び掛けている。	居室には利用者用のヘルメットが設置され、入所者参加で避難訓練を実施している。法人職員を含めた通報システムや、救援が来るまでのホーム職員の手順、ハンドマイクの使い方など、夜間防災マニュアルが整備され、災害対策への意識が高い。また、運営推進委員会にはホーム長を含め3名の消防団員がおり、地域との協力体制を築いている。	
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	個人の記録については事務室保管している。トイレ時はアコーディオンカーテンを閉めたりして対応し、居室もドアを閉めて入室時はノックをして入るように指導している。	一人の空間を楽しむ人には、部屋食を提供し、同性の入浴介助を希望する人へも意向に添って対応し、方言でも丁寧な言葉を使い、入室する際は必ずノックをし、カーテンをあける時も利用者の意思を確認するなど、一人ひとりの尊重とプライバシー確保に努めている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	出来るだけ自由に過ごしていただくことを念頭においているが、危険がある時は職員が付き添いを行っている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	外に出たいと希望する利用者には、職員が付き添い散歩が出来るようにしており外出の希望があれば支援できる体制にしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	馴染みの理美容室があればご家族が連れて行かれたりされている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	現在は、毎食法人で作られたものを提供しているので食後の食器を寄せていただく程度である。誕生会では何を食べられたいか希望を聞き提供している。時々おやつ作りには手伝ってもらってる。	法人の栄養士が摂取状況の確認や、嗜好調査を行ない、一人ひとりの好み把握されている。外出の際は、前もって計画し依頼すれば弁当も用意される。	職員は配膳や介助で同席するものの、別途、持参した弁当での食事となっていた。交替でも、利用者と一緒に同じものを食することで、味付けや適量、食べやすさ等の確認も出来、話題も広がると思われる。また、時には一緒に献立を考え、食材購入に出かけ、下ごしらえや味見をするなど、できることを一緒にする楽しみの工夫も期待したい。
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	少食の方には補食として高カロリーの飲み物を提供しており食事量、水分量のチェックが必要な方はチェックし日誌に記載している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後に洗面所に入れ歯洗浄とウガイをしている。一人で出来る方については必要品だけ用意しご自分でおこなって頂く。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	リハビリパンツを使用していた方について普通のパンツに戻したりその人の状態に対応している。	入所時にオムツやリハビリパンツ使用だった人も、トイレの訴えを見逃さず、こまめに誘導を行った結果布パンツに戻ったケースがある。排泄自立への支援で本人の暮らしぶりも安定し、家族にも喜ばれている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	昼間の特性ジュースにオリゴ糖を入りのものを提供。また、おやつにさつま芋を提供したりしているがどうしても便秘のある人は緩下剤を使用している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	現状は、火、木、土の週3回の午前中に行なっているが、他に入浴の希望があれば出来る体制はとっている。	事務所にあったエアコンの1つを職員の提案で脱衣所に移設し、入浴し易い環境を作っている。来年度は、入浴剤や、みかん、菖蒲を入れたり、足湯に出かけたり、楽しみを増やす支援が計画されている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	昼間は、出来るだけ起きておられるようにリハビリを行なっている。廊下には長イスを置き休息できる環境を作っている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	12月に服薬についての勉強会を職員に対して行った。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	洗濯物たたみなど家庭でされていたので率先してたんでもらう方が3名ほどおられる。歌が好きな方は童謡や歌謡曲など歌うレク活動を行っている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	秋になればコスモス見学を遠方に行ったり紅葉見物を兼ねて故郷訪問を行なったりした。運営推進委員の中からボランティアで添乗してもよいといわれる方がいるので協力をお願いしたい。	ホームの日用品購入時には、入所者も同行し、おやつなどの買い物を楽しんでいる。これまで、月1回程度だったドライブを、来年度から月2回のペースで考えており、花見・バラ園・道の駅・コスモス園・故郷訪問など、たくさん楽しみを計画している。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	家族からは預かり金を預かっているのでご本人希望時や行事での外出時にその中から小遣いを拠出して一回に2千円程度渡し買い物を行って貰っている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	毎日面会に来られるご家族は遠方に居られる家族から利用者に電話を入れて話をされている。利用者には、年賀状を一言を書いてもらい郵送行うよう準備している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	夏場は西日が強い居室については寒冷斜を設置し日が強く入らないようにしたり季節に応じて飾りつけなどを行っている。	広い食堂兼リビングのテレビの前に、テーブルの高さにした大きな炬燵が置かれ、ソファに座ったままや、車椅子に腰掛けたまま暖まることができ、ゆっくりしたくつろぎのスペースになっている。オープンキッチンからの職員の見守りもあり、安心して過ごせる環境になっている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	共用のプレイルームには、ソファを置いているが現在では、一人ひとりの居場所が決まってきた。そこが落ち着く場所になっていると思われる。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	出来るだけ入所時に家庭で使用されていたものを使い慣れたものを持参して頂くようお願いしているが、新しいものの購入が多い。一部の方は昔使用のものを持参されている。	転倒の危険がある人は、タタミを敷き布団を使用したり、居室で過ごすことが好きな人の部屋は、テレビや新聞、書籍等が置かれていた。また、家族の面会が多い人は、家族も過ごしやすいような部屋作り等、家族と相談しながら工夫している。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	失見当識障害で部屋やトイレの分かれなない方は表札とトイレ表示で行き場所を探しておられる。		